シリーズ隠れた建築紹介「丹巖洞（たんがんどう）」

旧福井市街地は戦災と震災によりほとんど全ての建物を焼失し、建物だけでなくその後の区画整理により旧城下の面影を偲ぶことも難しくなっている。そのことが現代の福井の都市イメージを希薄なものとしているが、その中にあって戦火によって焼失した宝永年間（1704年）創建の松平邸内の数奇屋建築「養浩館」ならびにその庭園が市の進める「歴史のみち整備事業」の拠点として近年再建されたことは意義深い。しかし遺構の復元でありかつ住宅街の真中に立地していることもあって、景観全体を当時の雰囲気そのままに伝えることには当初から限界があったようにも思われる。

今回紹介する土蔵風草庵「丹巖洞」は、松平藩医侍医長山本瑞庵の遊息所（別荘）草庵として弘化３年（1846年）に庭園ならびに薬草園とともに建てられたものである。「丹巖洞」の名は草庵の名前であると同時に庭園と薬草園を含めた総称でもある。現在薬草園こそなくなっているが、草庵ならびに鬱葱とした木々ならびに切り立った崖からなる庭園は２つの災害による被害を受けることなく昔そのままに残されており、郊外化した住宅地の中にあってこの風景が残されたことはまさに奇跡としか言いようがない。この「丹巖洞」は勤皇討幕の志士たちが密議所として利用したところでもあり、戦後の河川改修まで大きく蛇行していた足羽川がこの前を流れていたことは密会には好都合であったに違いない。松平春嶽、橘曙覧、橋本左内、中江雪江、横井小南、坂本竜馬、由利公正といった明治を切り開いた文人たちがここを利用したことが記録に残されている。

土蔵風草庵「丹巖洞」の規模は、間口２間奥行き３間の土蔵造りを下屋等によりいくらか大きくした程度に過ぎない。しかし質素な数奇屋風造りのその内部は、驚くほど広くまた凛としている。そこに勤皇討幕の志士たち息づかいを感じるのは私だけではないはずであり、私はそこに福井の文化気質の一端を垣間見ようとするのである。

「丹巖洞」は昭和３年に宮崎家が譲り受け、現在「料亭丹巖洞」の一部としていきとどいた手入れがなされている。

（史跡）料亭　丹巖洞　　福井市加茂河原１丁目５の12
（午前のみ一般公開）
TEL（0776）36-2668

— 福井大学　奥田　徹

いきいき街づくり　金沢市東茶屋街の町並み保存とまちづくり

金沢市東茶屋街は、商家町、武家町、寺町、茶屋町など様々な町並みが残る金沢にあっても、きわだった個性をもつものの一つである。そこ彼処からもれ聞こえる三味線の音や、卯辰山のみどり、繊細な表情を持つ茶屋建築の町並みがあいまって、金沢を代表する風情あふれる界隈となっている。東茶屋街では、金沢市独自の修理・修景補助事業による支援の下で、住民による町並み保存が進められてきている。また、増大する観光交通による生活環境の悪化を防ぐために、地区内への車両進入規制や駐車場の設置等も行われてきている。このような成果を受けて、現在は伝統的建造物群保存地区指定を目指した取り組みが進められている。

近年、歴史的町並み保存の取り組みは、文化財保護的視点からまちづくり的視点へと、その視座が拡大してきている。その背景には、町並み文化の継承者であり、生活環境へのトータルな眼差しを通じて町並み保存に取り組んでいる住民の存在がある。このような眼差しに支えられて、町並み保存の営みは、住民・事業者・行政が共に学びあう環境学習と政策開発の場へと高められてきた。

東茶屋街の町並み保存は、伝建地区指定によって新たな局面を迎えることになる。

地元小学生による東茶屋街の写生大会

地区の将来像を描き、実現していく手段として、伝建地区制度による保存計画や現状変更許可制をとらえ、まちづくりに積極的に活かしていくような取り組みが望まれる。

— 金沢大学工学部　小林　史彦

「支部長のあいさつ」

20世紀最後のそして21世紀最初の北陸支部長の永田忠彦です。掲載の写真では若そうに見えますが、実物はもう少し老けていて63歳です。福井大学で建築環境工学の研究と教育に携わっています。支部長としての任期は、建築学会の定款改定のため2000年６月から2002年５月までとなっています。その間、北陸支部のために微力を尽くしたいと思っています。

北陸支部内の５県は地理的なまとまりのある一体感にやや欠けた社会環境のもとに置かれていますが、本誌「AH!」が北陸支部の一体感を高めてくれることを期待しています。

日本建築学会北陸支部ニュース「ＡＨ！」第19号

発行日　2000年12月15日発行

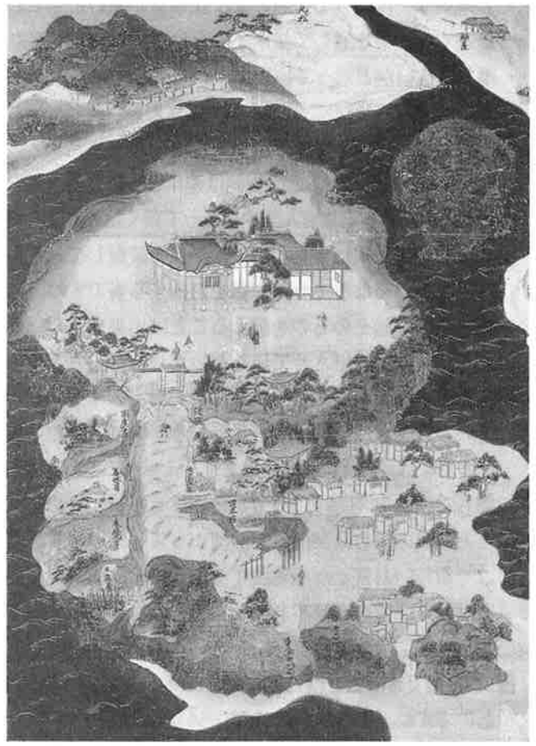
発　行　日本建築学会北陸支部広報部会
伊藤　晋栄（新潟）　尾久　彩子（富山）
西山マルセーロ（長野）　池本　敏和（石川）
野嶋　慎二（福井）　石川浩一郎（福井）

事務局　室田　文男・瀬口さゆり
〒920-0863 金沢市玉川町15－1、パークサイドビル３F
TEL&FAX 076-220-5566

AH OKURIKU 第19号

特集

地域，伝統，風習



左上：吉崎御坊絵図（紙本著色・江戸時代、勝念寺 旧蔵）
右上：光暁山・勝念寺
右下：燕喜館

支部ニュース「AH ！」の第19号をお届けいたします。これまで続いておりました「酒シリーズ」を「いきいき町づくり」と本号から新シリーズになりました。近頃いたるところで衰退しつつある町の再生プランをよく見聞きします。効率、合理性を追求している大企業のスピードとは異なり、歩く、呼吸するといった人の生活リズムにあった、時を忘れて歩ける町がたくさんでてくることを願っております。

地域・伝統・風習

2000年8月22日新潟市「燕喜館」にて

出席者:黒野　弘靖さん　新潟大学工学部　(新潟市)
佐久間邦昭さん
(有)佐久間建築設計事務所(新潟市)
清水　恵一さん　清水組(株)　(上越市)
司会　樋口忠彦
(社)日本建築学会北陸支部新潟支所長

樋口:学会機関誌「AH」に地域・伝統・風習というシリーズがあります。今回新潟でご活躍の皆様でこのテーマに沿ってお話ししていただきたいと思います。地域をあまり特定しないで、自由にお話ししていただきたいと思います。

伝統の継承

黒野:私は大学で伝統的な住居や街並み、および集落の再認識などを研究しています。調査に携わっていると、住居や街並みはその地域の伝統や風習に非常に密接に関わっているし、食べ物や衣服や芸能などと一体となって、その伝統的な建築の良さを知ることができるものと感じています。近代になって、伝統的なものがどんどん崩壊し、壊れ去っていく過程にありますが、伝統を誇りとして持ち合わせているところは残っていて、あまり関心がなくなってしまったところは、急速に廃れているのを肌で感じます。それぞれの地域での伝統風習は大事で、きちんと再認識していくことが重要だと考えております。

樋口:ありがとうございました。それでは、佐久間さんお願いします。

佐久間:新潟市内で設計事務所をやっております。25才の時から数年間裏千家の総家のご指導を得ながら、茶室関係や数寄屋関係など一連としたものを担当させて頂きました。新潟に戻りまして、寺院関係、神社や茶室を主にした仕事をはじめました。私のお客様は皆さん400年500年の伝統を背負っておられる方々ばかりでございますが、皆さんに共通しているものは「文化の継承」についてだと思います。伝統とは私にとりましては文化ではないかと。文化というものは簡単に言えば「継承」で、日々の蓄積が文化になるのではと思っております。伝統になりますと変えてはいけない「もの」と、変

えていい「もの」があると思いますが、しかし継承で一番大事なのは人材、人だということです。しかし、その人達が今一番困っているのは、仕事量が無いと云うことです。仕事を通して継承するという事が一番大事な事ではないかと思っています。

樋口:今の継承問題のことですが、継承という問題はそれぞれの社会によって違うようですね。

佐久間:神社でたとえると、祝詞は連年として変わっていませんが、参拝者に喜んで中に入って頂くためには、畳ではなく椅子式にするとか、床暖房を設置して足下が冬でも暖かくなるような配慮を計画する事ですね。ただ建物の形態そのものを変えることは出来ません。私どもで屋根を修復させていただいた「勝念寺」さんの場合は東本願寺の系統で、東本願寺の建方のイメージがそのまま全国に伝わっていると云う事です。だから形そのものは、風土には馴染みません。京都の場合は雪が降らないので「平入り」でもかまいませんが、そのままだと新潟の場合は参道に雪が溜まってしまいます。そこで新しいお宮とかを建築するときには、唐破風などを付けて、雪を両サイドに落とすように工夫しています。

樋口:最初できたときは、それなりにそこの地域性を考えたのですね。それが京都からいろいろ派生して行くと、そのようになるのですか。伝統建築もなかなか難しい問題があるのですね。それでは次に清水さんお願いします。

清水:上越市から参りました清水です。本来私は構造屋で、超高層ばっかりをやっていました。超高層の設計をやる上で必ず過去に起きた地震のことを検討します。過去の地震歴を調査しているうちに、風土や地震によってどんなふうに街が変わってきたかに興味を抱くようになり、上越に戻ってからは、自分達の街の歴史などがどのように変化してきたかを調べ始めました。構造的立場でみても風土、あるいは気候によって、その建

新潟支所長
樋口　忠彦さん

新潟大学工学部
黒野　弘靖さん

㈲佐々間建築設計事務所
佐々間　邦昭さん

清水組㈱
清水　恵一さん

て方や組み方の違いがあるものがたくさんあります。また過去の伝統的な建造物を見ているうちに、歴史的に残った建物は、「ある偶然性」と「維持しようとする力」とが重なり合って、初めて我々の目の前に建っているのではと考えるようになりました。私の住んでいる高田と言えば「がんぎ」が中心になります。気候風土(雪)が、全てのものに影響している中で街並みにとけ込みんだ「がんぎ」は、やはり自慢のものです。三百年ぐらい経ちますが、時代の変化を遂げながらも形態を維持しながら建っています。アーケードという形に変化していますが、私有である土地の中を、他人に使わせようという「通り」なんです。このような使われ方が、同じ形態を続けながら継続している街はおそらく無かったのではないでしょうか。これらの過去を継承し、今の時代に住民の認識として引き出す事が出来れば、街づくりとして非常にすごい力になるのではと考えています。ただこの古さの中での住みにくさが、この「がんぎ」の町屋にも影響しています。この住みにくさを、今の住環境や、子供たちの精神的な問題として、その中に取り入れる事が出来ればもっとすばらしい世界が開けてくるのではないでしょうか。

樋口:その古さの中の住みにくさというのは具体的にどんな住みにくさですか。

清水:2部屋とれるところが少ない。また町屋ですから、あって二間半、三間まであるところは少なく、縦の間取りになっています。日本の間取りは襖と障子ですが、日本人のプライバシーは相手に対する気遣いだと考えていますので、障子1枚や襖1枚によって人の気配を感じ取れる様な空間が、日本人の今までの歴史と伝統を引き継いでいる良さだと、そんな気がします。住みにくさのもう一つは、やはり暖房設備だと思います。設備機器をうまく利用できないことで、断熱効果やあるいは通気のことが少し問題になっております。

樋口:「がんぎ」は個人所有なのですか。例えば前の方(通り)の所有のことですが。全国的な事例としてはどうでしょうか。

清水:昔の建物ですとだいたい「公」の方が多いようです。大阪あたりですと完全に「がんぎ」前は「公」なっています。江戸だと半分位だという話もありますが、高田の場合ですと江戸時代には全部私有です。それが今まで引き継がれて来ましたから、どこのお宅に行っても私有地である事に対しては、不自然に思っていません。

お祭りと風習

樋口:黒野さん、いろんなところにも誇りが残っているとの話がありましたけれど、具体的には。

黒野:金沢や京都で、祭りの時に各家ごとに家財を置いて見せるようにしますよね。そのことと町屋の間取りとは当然関係しているわけで、町全体を動かす「お祭り」に対するソフトウエア的なものとしても生きていますし、祭りだけのために、それを支える住宅の間取りもちゃんと保たれています。新潟県でも高田やもっといなかの津川などでも「がんぎ」に似たものを残そうと一所懸命やっています。また「がんぎ」ではありませんが、岩船町では飾りつけを家の中でやるというお祭りをやっています。いずれにしろ、芸能とか風習とか伝統に誇りを持っているところは、やっぱり街並みもそれなりに統一感が確立されていると思います。

清水:住居街並みというのは街並みだけではなくて、生活の中にも密接に関わっていて、関わりを捉え直していかないと残っていかないこともあります。お寺さんはお寺としてまだ存在するわけですよね。生活習慣、ある意味で風習でもあると思いますが、いまも我々の生活そのものを支えてくれています。伝統的というのは何かそういう支えるものがないと…。

黒野:新潟のお寺さんの場合、約400年前にだいたいの街並みが出来ました。新潟は大きな港町ではありませんが、お寺、寺院が京都と福井、石川、富山に伝わり、新潟にきて本当の黄金時代になったわけです。新潟で

一応止まっていますけど。寺院は石川県から来ましたが、お寺さんだけでなくそのお檀家の主だった方達が一緒に動いたそうです。それで盛り立てているのでしょう。

清水：現在において檀家はお金をにぎっている所でしょう。だから、意図的にそのようなことを継承していく努力をしてもらわないといけないと思いますが。

樋口：今は公共自治体などがそのような役割を持っているのじゃないでしょうか。壊れそうなものを公共自治体などに、管理とかもふくめ伝統を保存するという事で意識的な処置をしてもらわないと。公共事業っていうと色々叩かれるけれども、そこにもっと文化的要素の補足を含めた形で、文化を守るものとしていれば、誰もが納得すると思いますけど。

佐久間：お寺さんにしてみれば、檀家さんから頂戴したお供物やお賽銭で「やっと出来ました」と皆さんにお披露目し「今日は、仏さんも喜んでくれていますので皆でにぎやかにやりましょう、飲み明かしましょう」というイベントですね。いわゆる伝統建築って云うのは祭りなんですよ。だからそのお祭りを一番見てほしいと思います。静かで静寂した場所の代名詞が「お寺さん」というふうに言われていますが、静かな佇まいもあるかもしれませんが、お寺さんが本来生きているのは祭りの時だと私は思います。

樋口：私どもには「報恩講」の祭りは、子供の時の一大イベントでしたね。

佐久間：そうですね。10月か11月頃にやります。街全体が出店で一杯になり、学校があっても、ないようなものでしたから。一緒にサーカスも来るし、色々な見せ物が来てね。それがだんだん祭り事が無くなってきて、お寺の中に入っての祭り自体が無くなって来たみたいです。

黒野：今、お祭りって話も出てきましたが、少しずつ呼び起こして、伝統まで行ってくれれば、実は地域起こしにつながるような話だと思います。最近色々なお祭りが復興していますが、そういう事じゃないかと思います。風習、伝統、地域、それらをもう一度、再生させてみようという事で、建築がらみのお祭りをもう少しやらないといけないようですね。また公共的な建物で神事を否定したことが、建築そのものに対する大衆の心が結びつかなくなったという見方もありますが、「公」という形で出来ないのであれば、「民」という形でなにかイベントを考えてもいいのかなあ、と思っています。

（一同：そうですねぇ。）

佐久間：構築するっていうか、建てていくというか、物を作る面白さや物を立ち上げていく面白さとかを併せたイベントを開催出来たり、伝えられてきた風習をもう少し掘り起こしていく事が出来たら楽しいと思うけど。

樋口：伝統的なものの中に上手く組み込むことが出来るって云うのは、また新しい伝統の継承のやり方では、という感じもしますが。

清水：今の形や材料を利用しても、連続性がやっぱり一番重要だと思います。重要なものであったからこそ、生き続けてこられたんだと。「がんぎ」を次の時代に引き継いでいくのに「公共」にしてもらう必要はありませんが、自分達の生活の中でどんなふうな形態になっていくのが自然なのかを考えていけば、「昔のがんぎ」と変わってもいいと思います。

佐久間：これからは、その「がんぎ」というものの精神を利用して新しい共同住宅などが計画できるのではと思います。「がんぎ」のイメージを模索した新しい共同住宅。そうなると、お隣さんが何をしているのか分からないのでなく、掃除をしたついでにお隣さんの廊下の部分も綺麗にしてあげれば、お隣のおじいちゃんが気分良くなった、という現代的な解釈をすることが出来るのではないでしょうか。

清水：伝統的なものを現代の価値で再確認することが出来ていれば、材料は必ずしも昔の材料を使わなくてもいいと思います。ただその土地や地域の持っている基本的な形態というものを分かっていないと、でたらめに造ってしまう可能性が有るわけですね。偽の町を再建してしまう可能性があります。やり方をどう変えてもいいけど、底に流れている伝統的な物まで変えてしまうと、まるっきり違う地域になってしまいます。それを後世に伝える時、あたかもその地域の伝統であったかの様に。これではとんでもない物が出来てしまうので、十分注意を払わないといけないと思います。

樋口：伝統という言葉を調べてみたら、系統を受け伝えることが伝統だとでていました。系統というのは今までいうシステムですね。システムを受け伝えることが伝統だと。現代建築の中になんらかの形で系統が入っていると、現代建築そのものは系統として、システムとして結果が出てくる可能性が十分ありえるわけです。お祭りとか、そこでの生活とか、全てひっくるめた形でのシステムというふうにとらえれば、それらを引き継いでいく事が、現代建築を我々の生活に合ったシステムとして、世に受け入れてもらうことが出来るのではないでしょうか。

それではこのへんで、ありがとうございました。

在宅療養とトイレのこと

私の仕事は訪問看護。病気や高齢のため，自宅で療養している方を訪問し，療養相談にのったり，生活上のアドバイスをしたり，お世話の援助をしたりする仕事です。自宅で療養をしてる方の多くは何らかの理由で歩行が困難になり，外出はもちろんトイレ通いですら誰かの手を借りたり，もしくは全面的にお世話をしてもらうことが必要になっています。これらの方々や，お世話をする私たちにとって，トイレの使いやすさは非常に重要な意味を持ちます。家を建てるときには居室部分や収納場所にばかり目が行き，トイレ部分は余り重要視されていないのではないかと思います。（実際わが家を建てるてる場合もそうでした。）しかし，１日に何度もお世話になる場所だからこそ家の中でもっと大切にしなければならないところがトイレなのではないでしょうか。「健康な自分には関係ないわ・・・」等いうことなかれ。現代はいつ交通事故に巻き込まれるかわからない車社会。病気だって「自分は大丈夫」などという保証はまったくないのだから・・・。たとえ自由が利かなくても，少しでも快適に暮らすためにどんな工夫がいるのか，いざというときに動揺しないためにも，元気な頃から考えてみたいものです。例えば，お世話をする者の立場から見ると，トイレの中に洗い場があるとどんなに便利だろうと思います。尿器やポータブルの洗い場がトイレの中にあると，いちいち廊下に出て水道のところまで移動しなくてもよいので，お世話は格段に楽になります。洗い場を設置するということになると，少し広めのトイレが必要になる訳ですが，広いトイレは車椅子での移動の際にも動きやすく，介助する人も一緒に中に入れば，一人で移動できない人でもトイレの使用が可能になります。一方，利用者側から見ると，いつも過ごしている部屋の近くにトイレがあればとても安心です。わが家などは大失敗だったのですが，トイレが玄関近くにあるため，ドアを開けていると玄関から中が丸見え。車椅子になったら気になってゆっくり移動などできないかもしれません。部屋の中に自分専用のものがあれば言うことなしですが，元気なときには来客のことを考えるといきなり部屋の中というわけにもいきません。一つの工夫として，なにかあったときの療養部屋になるであろう部屋の近くにトイレを作り，いざというときには壁の一部をはずすと居室内のトイレになるくらいの工夫を家を造るときから考えてみるのも良いのではないかと思います。バリアフリーという言葉が一般化され，住宅を建てる際にもそれを希望する人も増えています。限られた土地の広さで限られた建築予算の範囲で無理なく活用でき，かつ，使い回しのきく家造りの提案，いざというときの療養室とトイレのこと，利用する側にとってもお世話する側にとっても使いやすい一工夫を。住宅建築に関わるみなさんの適切かつ楽しいアドバイスを期待しています。

― 訪問看護ステーションつくし　山本真由美

淡路夢舞台

むき出しの法面に植えられた、６年前には10㎝程度の苗木だったはずの、今では人の背丈ほどもある木々。

人間の作った建築物は10年も経てば自然の中に埋没するようなものであるべきだという考えのもと、作られた建物達。

10年後がとても楽しみです。

（富山国際職藝学院　柳　真子）

国体開催の年に思うこと

世の中の変化のサイクルは１年、半年とどんどん短くなってきていますが、「まちの顔が変わった」「田んぼの真ん中に道が通った」という観点ではまさに「10年ひと昔」。

富山のまちも大きく変わりました。かつて地図の上で点線で描かれていた都市計画道路が、まちなかを横断し、背の高い建物があちこちで建ち並ぶようになりました。

今年の2000年とやま国体開催に向けて、準備、計画されてきたものが一挙に形となって現れてきた感じがします。遠方から訪れる人にはもちろん、県内に住む私達にも、通勤･行楽などに大変便利になりました。

しかし、もちろん「便利さ」＝「楽しさ」ではありません。「車がないとどこにも行けない」といわれる富山。車で「目的地」に向かう生活では、「移動」の楽しさを感じることが難しいまちになっているように思います。

私は大阪で何年か生活をしてきましたが、移動の手段は専ら電車や地下鉄でした。天気が良い日、気分が乗った時は一駅二駅の距離を歩くこともよくありました。まち歩きは楽しい。表通りからは見えない所におしゃれな雑貨屋さんがあったり、凝った造りの飲食店があったり。ポケットパークで一息入れるのもまた楽しい。こんな場所を発見できたという喜びが、まち歩きに満足感をもたらしてくれます。

富山では車で10分の距離を30分かけて歩いてみようと考える人は多くないと思います。そこには単に、車社会だからという言葉で片付けてしまえない理由もあるように思います。車の窓ガラス越しからでは、まちのもつ新たな一面に気付きにくい事もありますが、流れるまちの景色の中に、ふと立ち寄りたくなるような空間がまだまだ少ないことも理由の一つではないかと考えます。

もう一度訪れたいと思わせる何かをもっているまちは楽しい。今年富山に来た人達は、目的地以外でもたくさんの思い出を持ち帰っていってくれたでしょうか。

富山のまちが、点(目的地)と点を結ぶ線(道路)だけで構成されたまちとならないように、線の中にも楽しい空間がちりばめられたまちとなるように、私達もまちづくり、建物づくりそして魅力ある空間づくりに、努めていきたいと思います。

―(株)創英建築設計事務所 稲垣 由希子

国体の馬術会場(常願寺公園)

住民と行政の協働による公園づくり

現在、全国各地で住民と行政の協働による公園づくりが展開されていますが、福井市のような地方都市では、まだ住民側も行政側も協働という概念を受入れる体制が整ってはいません。

住民にとって公園などの公共施設は、「行政が勝手につくり、管理するもの」と思い込んでいたり、また行政でも「住民はあれこれ欲しいと要望するだけで、自発的には行動しない」と思っていたりしているのが現状です。

このような中、地元住民の方々の要望で市営団地跡地の約2,500㎡の敷地が公園予定地として確保され、福井市では始めての協働による公園づくりが始まりました。

まず、作業の方法として、「ワークショップ方式」をこちらから提案しましたが、この地区は、自治会組織が成熟しているため、当初、自治会の役員だけで公園の案を考えれば良いのではないか、という意見が多数を占めました。

しかし、世田谷の「ねこじゃらし公園」のビデオを見て、色々な層の住民が集まってワークをする方が、楽しくて大切だということに自治会の方々が気付き、それからは、我々の予想以上に地元の方々の動きは早く、自発的に新たな組織をつくり、アンケートやワークショップについて検討し、運営するまでになりました。

組織のメンバーも、20代から70代までと幅広く、その約半数は女性が占めています。

また、今回は運が良いのか悪いのか、コンサルタントへの委託費用がなく、本当の意味でも、住民と行政の協働による手づくりの公園づくりとなりました。

これまでワークを４回、また最近では地元の方々が約300人以上参加して、公園予定地の草刈りも行われ、ますます地元の気運も高まってきています。

今後、更に公園のデザインや維持管理の方法等について検討していく予定でいますが、公園が出来上がるまでは、地道に息の長い協働による活動を進めていきたいと考えています。

最後に、住民と行政の協働とは、お互いに信頼し、かつ責任を持つことだと思います。皆さんも一度体験してみてはどうでしょうか？おもしろいですよ！

―福井市建設部公園課　技師　下川明秀

信州伝統的建造物保存技術研究会の活動より

信州伝統的建造物保存技術研究会の活動より

信州の伝統的建造物の保存と、保存のための伝統的な材料や技術の継承を目的として、信州伝統的建造物保存技術研究会が生まれてから、８年目となります。

長野県内の大工･屋根屋･左官をはじめとする伝統的建造物保存技術者、建築士、研究者等の正会員、伝統的建造物を所有･管理者を対象としたやまびこ会員の130名、賛助会員18社の会員がおります。県外の会員の入会も増えています。

文化財として指定されていない伝統的建造物の保存･再生も重要課題となっています。伝統的建造物である民家の掘り起こし、登録文化財に申請のための調査など、県内各地からの相談窓口として活動しています。

調査報告書『棟柱』も今年は第３号が発行となりました。第１号は「保存技術に関する総合的な調査と記録」、第２号は「茅葺にみる屋根葺技術の調査と記録」、第３号は「北信の木彫と南信の鉄平石葺」となっています。

また、会員相互の技術紹介と理解をふかめるため、見学会と研修会を毎年開催しています。伝統的建造物の見学や、修理工事現場での保存技術の研修です。

「2000年７月１日、鉄平石見学会福沢山より諏訪湖をのぞんでのお弁当」

ここ数年は、屋根葺の技術についての研修会を開催しています。長野市善光寺紫雲閣の改築現場での瓦葺技術の研修。長野市専精寺で銅板葺の技術を。茅葺は解体修理の終了した北安曇郡美麻村の重文中村家住宅で、茅葺技術と大工棟梁による木組み等の研修。_葺は、長野市松代町の重文真田信重御霊屋修理工事現場。そして今年は、『棟柱』第３号をテキストに諏訪地方の鉄平石採掘現場見学と鉄平石葺建物の見学と研修会を。会員のほかに一般の参加者募集も行いました。

今年中に、ＮＰＯ法人団体として再スタートします。

―信州伝統的建造物保存技術研究会　　前田　暎子

村松城南御殿復元模型(卒業製作)

(新潟職業能力開発短期大学校
上村裕美・吉田嘉那子・桐生由子・本田章子)

(エンリコ･カスティリオーニ)